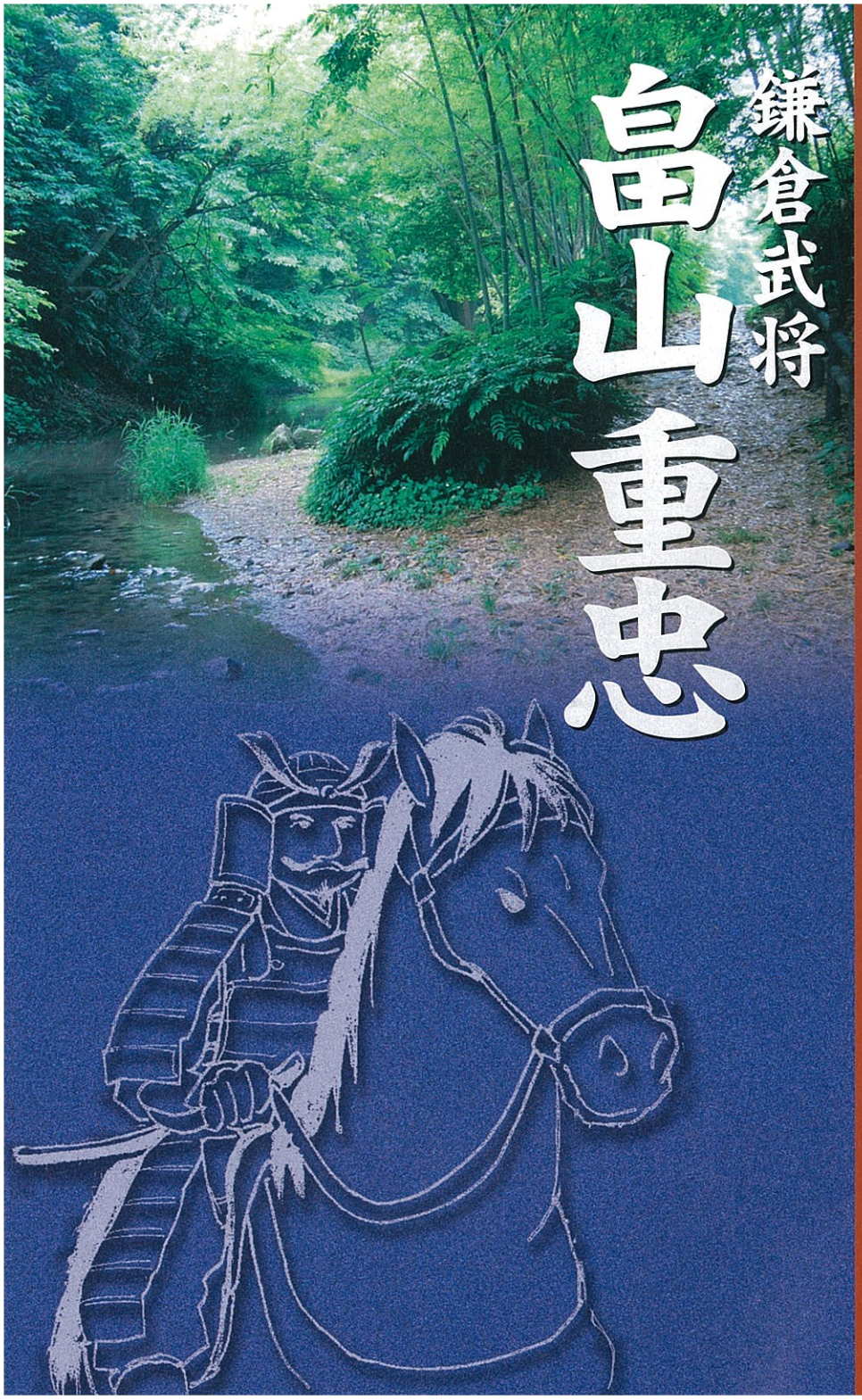


# 鎌倉武将 畠山重忠

旭区ふるさとの歴史再発見

## 重忠の足跡 菅谷館から鎌倉へ

●この冊子を作成するにあたり、以下の文献を参考にしました。

「畠山重忠物語」・「旭区郷土史」・「旭区散策ガイド」
「畠山重忠一代記」・「畠山重忠辞典」（川本町教育委員会）
「日本の歴史・鎌倉幕府」（中公文庫）、「小学社会六上」（教育出版）
「小学社会六年教科書ガイド」（新興出版社）、「図説日本の歴史・武士の活躍」（旺文社）


旭区ふるさとの歴史再発見
**鎌倉武将・畠山重忠**　　旭区誕生40周年記念改訂版

発行：旭区観光協会（旭区役所 総務部地域振興課 地域活動係）
旭区誕生40周年記念事業実行委員会（旭区役所 総務部地域振興課 生涯学習支援係）
〒241-0022 横浜市旭区鶴ヶ峰1-4　TEL.045-954-6092　FAX.045-955-3341

平成17年6月 発行（第一刷）
平成22年3月 改訂（第二刷）

編集：企業組合 創和設計　挿絵：江本 貴子
レイアウト：有限会社 ノンブル・オー　印刷：株式会社 古屋印刷

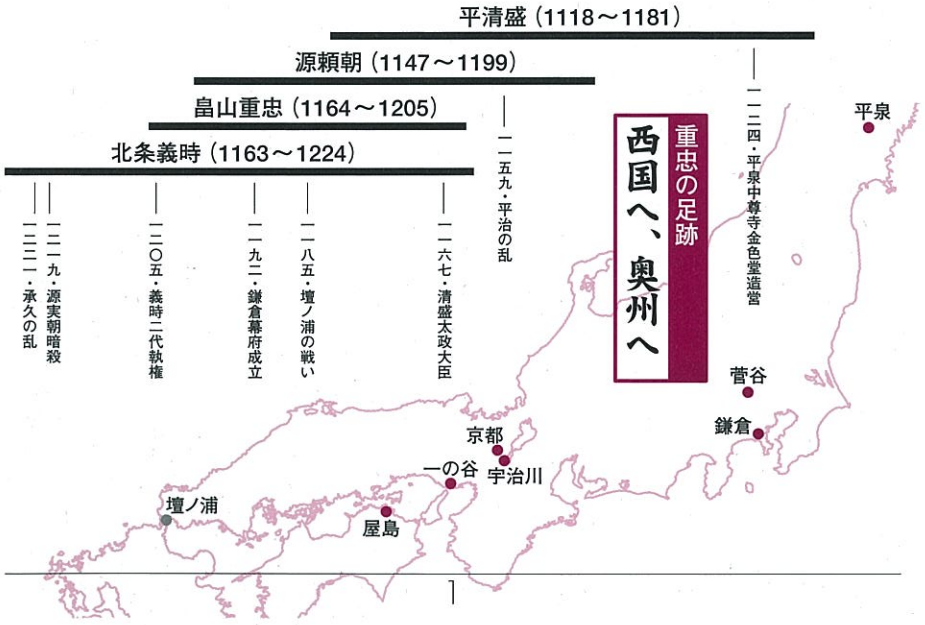
# はじめに

畠山重忠は、鎌倉時代に活躍した武将で、幕府を開くときにも力をつくし、源頼朝にたいへん信頼されていました。平氏全盛の時代に、現在の埼玉県川本町で生まれ、嵐山町に屋敷を構えていました。重忠は、源義経とともに一の谷や屋島で平氏と戦い、奥州征伐でも活躍したといわれています。

しかし、幕府の権力争いにまきこまれ、鎌倉に向かう途中、鶴ヶ峰付近で討ち死にしました。地元の人たちは、その人柄をしのび、八百年たった今も語り継いできましたので、旭区内には、重忠ゆかりの史跡がたくさん残っています。

この小冊子は、没後八百年を記念して、重忠の史跡にふれて旭区の歴史を身近に感じられるようにと作成しました。

この小冊子を持って旭区の街を歩いてみませんか。ちょっと足をのばして、鎌倉の町も訪れてみてはいかがでしょうか。重忠生誕の地や遠く駆けめぐった所を思いめぐらしながら、歴史再発見の小さな旅に出てみませんか。きっと、あなたも【重忠通】になれるはずです。






# 一　氏王丸の誕生

畠山重忠は、一一六四年、武蔵国大里郡大字畠山の地で生まれ、幼名は氏王丸という。

重忠の家は代々検行職を務め、父、重能は武蔵（関東）武士の棟梁と仰がれていた。

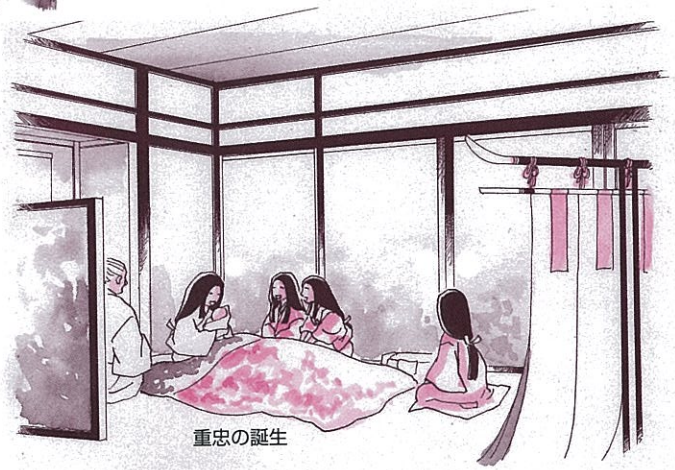
母は、相模（今の神奈川県）の豪族、三浦義明の娘。

重忠誕生の年に、平治の乱（一一五九年）で源氏を破った平清盛によって、京の都に三十三間堂（蓮華王院）が建立された。

その三年後には、清盛が太政大臣に任ぜられるなど、まさに平家全盛の時代に、重忠は生まれたのである。

●検行職とは、武蔵の国全体の荘園の管理をする役目。

幼い頃より
武道にはげむ重忠



重忠の誕生

## 二　頼朝との出会い

一一八〇年、伊豆に流されていた　源　頼朝は、勢力をふるっていた平氏をたおすため、東国の武士を味方につけて、戦い始めた。

石橋山（小田原市石橋）の戦いでは敗れたが、小船で安房（千葉県）に逃れた頼朝は、再び兵をあつめ、鎌倉をめざした。

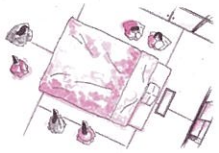
重忠は、平氏に仕えていたが、頼朝に従うことを決意。

源氏の白旗をかかげて頼朝に会い、鎌倉入りの先陣を命じられた。

この時、頼朝から、平氏は赤い旗なのに、なぜ源氏の白旗をかかげているかをきびしく問われた重忠は、「この白旗は、後三年の役の時、当家の祖先武綱が源　義家殿からいただいた由緒ある旗です。」と答えてゆるされたという。

一一八一年、平清盛六十四歳で世を去る。

最後の言葉は、「供養はいらぬ。頼朝の首を墓前に供えよ」であったと伝えられる。



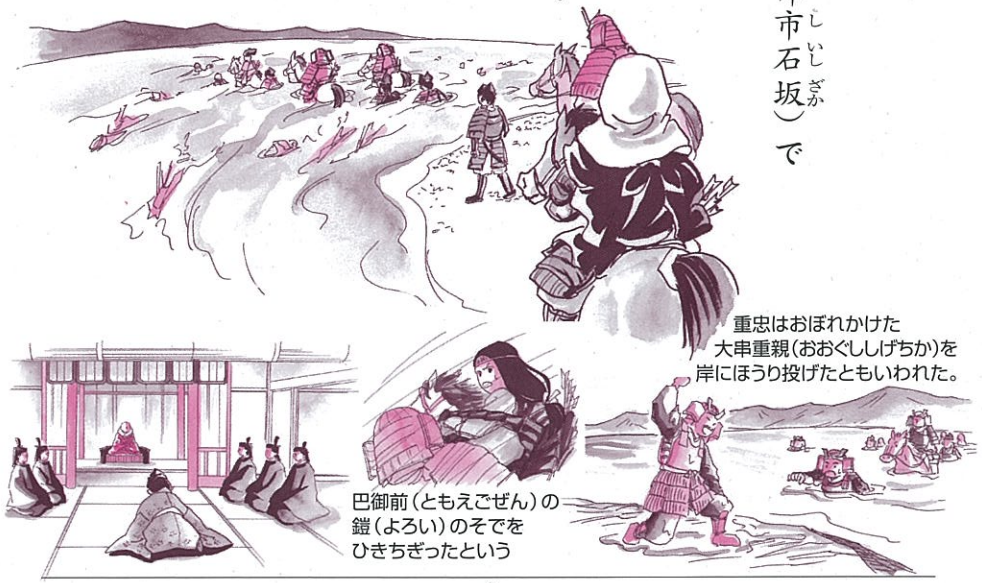
## 三　宇治川の戦い

一一八三年、木曽義仲は、倶利伽羅峠（富山県小矢部市石坂）で勝って京の都に入り、平氏は西国に逃れた。

しかし、義仲軍は、食糧を集めるため乱暴や略奪を繰り返したため、頼朝は、義仲討伐のため、弟の範頼と義経を都に向かわせた。

一一八四年、義経軍の重忠は、手勢五百余騎で水かさが増す宇治川を渡りはじめたが、途中で馬に敵の矢があたり、徒歩で対岸に渡って勇敢に戦い、義仲軍を打ち破った。

義仲、巴御前との戦いの後、都に入った重忠は、義経と共に後白河法皇の院の御所、六条殿に駆けつけ、戦況を報告し、法皇をお守りした。

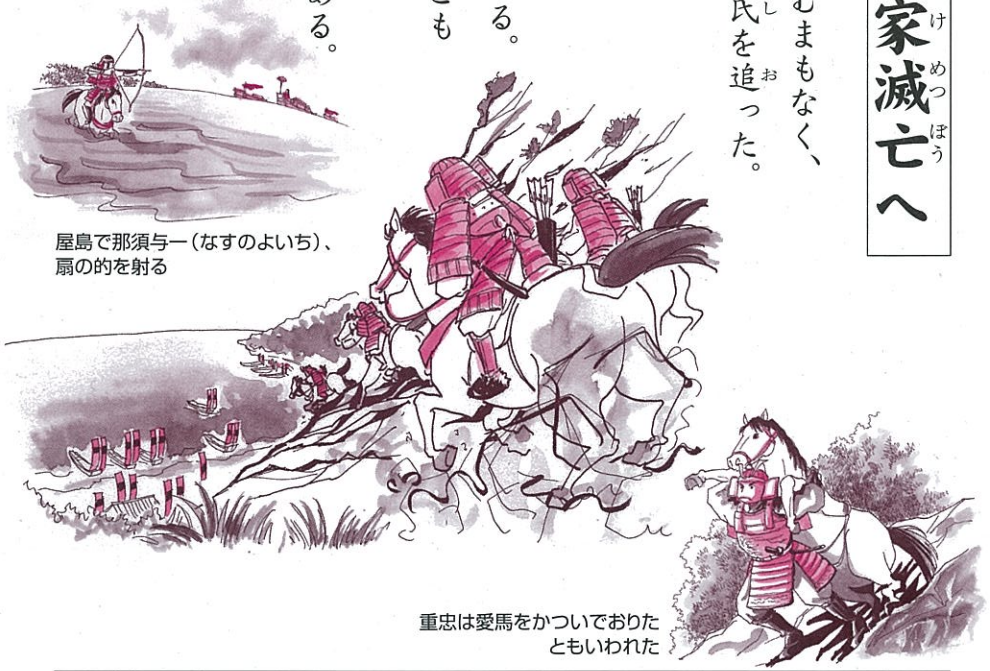


## 四　一の谷の戦いから平家滅亡へ

木曽義仲を討ち取った範頼と義経の軍は、休むまもなく、山が海に迫っている一の谷に軍をかまえる平氏を追った。

重忠は義経にしたがい、一一八四年二月、平氏軍を背後から見おろす、けわしい山『ひよどり越え』にたどりついたといわれている。義経は、先頭に立って、この急な坂を馬もろともいっきに駆けおり、敵の背後を攻めた。これが有名な『ひよどり越えの逆落とし』である。

この奇襲作戦によって、源氏の大勝利となり、敗れた平氏は、船で四国の屋島に逃れた。一年後、義経は屋島を攻略し、一ヶ月の後、壇ノ浦の大海戦で、平家をほろぼした。



屋島で那須与一（なすのよいち）、扇の的を射る

重忠は愛馬をかついでおりたともいわれた



## 五　重忠、銅拍子を打つ

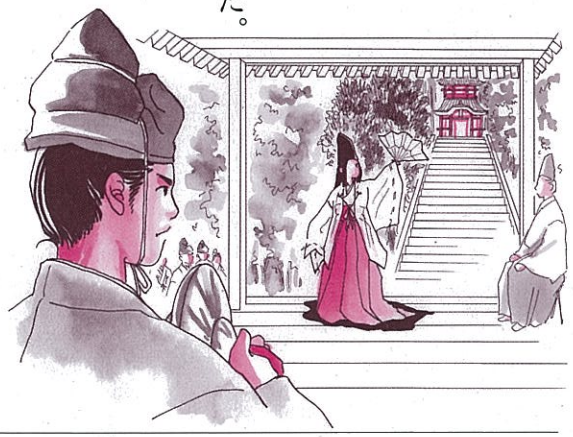
平氏との戦で大きなはたらきをした源義経は、その後、兄頼朝と対立して、京を追われる。

義経に愛されていた静御前は、とらえられ鎌倉に送られてきた。舞の名手として評判の高い静御前は、頼朝らにたのまれて、鶴岡八幡宮で、義経を偲びつつ舞を舞う。重忠は、その時、銅拍子を打った。

「吉野山　みねの白雪ふみわけて　入りにし人の跡ぞ恋しき」

静御前の美しい舞いと歌の伴奏をつとめた重忠は、武勇だけではなく、音楽など、幅広い教養をみにつけていた。重忠、二十三歳の春のことであった。

一一八九年、奥州の藤原泰衡は、衣川館の義経を襲った。義経は自害。三一歳であった。それから五百年ほど後、松尾芭蕉がこの地を訪れ、「夏草や兵どもが夢の跡」と有名な句をよむ。



## 六 所領没収される

一一八七年、重忠が地頭をしていた伊勢の代官が不正を働いた。
その罪で重忠は、囚人として千葉新介胤正の所に身柄を預けられ、
所領四か所を没収された。

絶食して謹慎していた重忠は、
胤正のとりなしで、頼朝に許されたが、
菅谷（現在の埼玉県比企郡嵐山町）の館に
ひきこもってしまう。

このことがもとで、『重忠、謀反を企てている』とうたがわれる。
頼朝は、重忠の友である下河辺行平を菅谷館に向かわせた。
重忠は『謀反の心などないのに、どうしてうたがうのか』と答え、
うたがいをはらすため、刀をぬいて自害しようとした。
頼朝は、ことのしだいを知り、再び重忠をゆるした。

## 七 奥州征伐

一一八九年七月、源 義経をかくまった罪で、
奥州の藤原氏を討つために、
頼朝みずからが率いる大軍が鎌倉を出発した。

先陣は、二六歳の畠山重忠がつとめた。
重忠は、先頭の兵八〇人の内、
三〇人に鋤や鍬をもたせて進軍した。

泰衡軍は、深い堀を築いて、待ちかまえていた。
重忠は、夜になると、兵に鋤や鍬をつかって、
堀を埋めさせ、軍馬が通る道を作らせた。
これで、進攻がうまくいき、勝利に貢献した。
重忠の用意周到さだけではなく、
土木技術にも明るい一面がうかがえる。

## 八　頼朝、鎌倉幕府を開く

一一九〇年十月、源　頼朝は京都に向かって鎌倉を出発した。
平氏追討に立ち上がって十年、いくたの戦いを勝ちぬいて、
ようやく戦乱の世を終わらせたのであった。

十一月、おおぜいの見物人の中を、
はなやかな行列で、都入りをはたした。
晴れの先頭をつとめたのは、畠山重忠であった。

一一九二年七月、源　頼朝は征夷大将軍となり、
鎌倉に幕府を開き、武士中心の政治を始めた。

## 九　永福寺建立

一一九二年、源　頼朝は、奥州征伐のとき、
平泉の中尊寺や毛越寺、特に二階建ての二階大堂（大長寿院）の
すばらしさに感動し、それを模して永福寺を建立した。

その時、力自慢の重忠は、
一人で力士数十人分の材木を運び、
大きな石をかついで、
庭の置石をすえるなどの仕事をしたと
いわれている。

こうして完成した永福寺だが、室町時代にはなくなったらしい。
しかし、二階堂という地名は今も残り、
現在は国の史跡として指定され、発掘調査が行われている。

## 十　頼朝の死

頼朝の最愛の娘、大姫は頼朝の願いもかなわず、一一九七年、二十歳でこの世を去った。娘のあとを追うようにして、二年後の一一九九年一月、頼朝は五十三歳で亡くなった。

前年の暮れ、相模川にかけられた橋の供養に出かけた帰りに落馬したのが原因と言われている。

頼朝は死ぬ間際、重忠を枕元によび、自分が死んだ後の子どもたちのことを重忠に頼んだ。重忠、三十六歳であった。

頼朝が亡くなると、長男頼家が十八歳の若さで二代将軍となった。

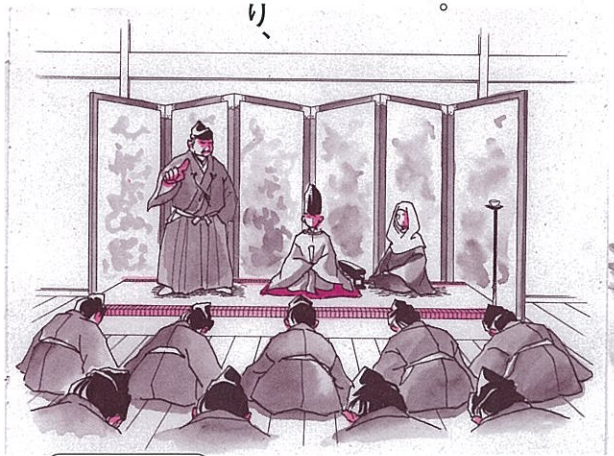
## 十一　権力争い

一二〇三年、頼家が重い病にかかったので、北条政子と北条時政は、頼家の子一幡に関東二十八か所の地頭職を、頼家の弟実朝に関西三十八か所の地頭職をゆずることを決めた。

この決定に不満をいだいた頼家たちは、北条時政を討つ計画を立てたが失敗。伊豆の修善寺にとじこめられ、やがて殺されてしまう。

その後、頼家の弟実朝が三代将軍となった。しかし、わずか一二歳の少年だったため、時政が政所の長官となり、幕府の実権をにぎった。

その頃から、二つの派が対立するようになり、時政と牧の方は、実朝を殺して、平賀朝雅を将軍に立てようとしていた。重忠は、その権力争いにまきこまれていくのであった。



対立する二つの派
- ●時政の先妻の子、北条義時（政子の弟）＋北条政子（頼朝の妻）
- ●北条時政＋牧の方（時政の後妻）＋平賀朝雅（牧の方の娘婿）

## 十二 重保の死

平賀朝雅は、都での畠山重保（重忠の四男）との争いごとを牧の方に知らせた。
それを知った牧の方と北条時政は、平賀朝雅を将軍にするために、
実朝に味方する畠山重忠を討つ計画を立てた。
時政と牧の方は、息子の義時に、
『謀反をくわだてている重忠を討て』と命令する。
しかし義時は、重忠の誠実な人柄を信じ、強く反対したが
うけいれてもらえず、やむなく父時政に従うことにした。

一二〇五年六月一九日、重忠のいとこにあたる稲毛重成の
『鎌倉に異変あり。』といういつわりの招きにより、
重忠は息子の重保を先に鎌倉へ行かせた。
ところが、六月二十二日の朝、重保は鎌倉の由比ガ浜で、
だまし討ちにあって、殺されてしまう。

## 十三 二俣川のほとりで

一方の重忠は、二男の重秀ら百三十四騎で、急ぎ鎌倉をめざした。
鶴ヶ峰についたとき、重保が謀反人として討たれ、
数万の大軍が向けられていることを知った。
家臣は、菅谷館へもどり、軍勢を整えることを進言した。
しかし、幕府にそむく心などいっさいない重忠は、
『重保が死んだ今、家のこと、肉親のことを
忘れるのが武士。一時の命をおしんで、
かねてより陰謀があったとうたがわれるよりは、
ここでいさぎよく戦う』ことを皆に伝えた。
重忠の決意に、全員がときの声をあげた。

一二〇五年六月二十二日昼、義時を大将とした数万の軍勢が
押し寄せ、二俣川のほとりは戦場となった。

# 十四 重忠の最後

四時間にわたって、激しい戦いがくりひろげられた。
重忠は、愛甲三郎の放った矢にあたり、
四十二歳の生涯をとじた。

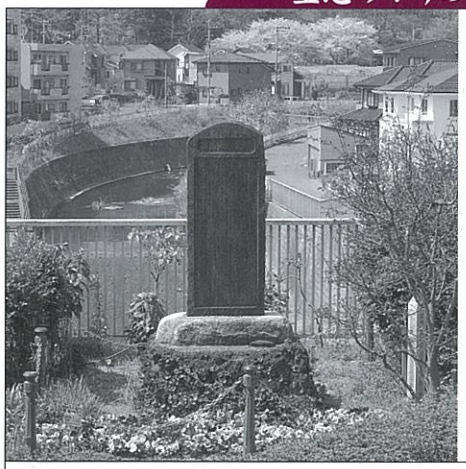
二十三歳の二男重秀も自決し、全員が戦死した。

陰謀によって、重忠を討ち取った北条時政、牧の方は
一二〇五年七月、鎌倉を追放され、北条義時が執権となった。

## 重忠ゆかりの史跡・伝承

畠山重忠が無念の死をとげた「鶴ヶ峰」の周辺には、重忠ゆかりの言い伝えをもつ史跡がたくさん残っています。どれもみな、地元の人たちに大切に守られてきた史跡です。どのような物語が秘められ、伝えられているのでしょうか。重忠ゆかりの場所にいって、歴史のとびらを開いてみましょう。

### ●畠山重忠公碑



昭和三十年六月、畠山重忠没後七五〇年を記念し、鶴ヶ峰と埼玉県川本村の有志により建立されました。碑は、水道道が厚木街道を横断する交差点の、見晴らしのよい場所に建っています。

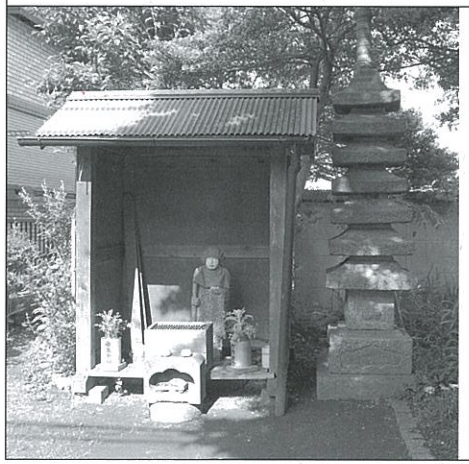
### ●さかさ矢竹

以前は、旭区役所裏側にありましたが、現在は川が埋めたてられて、見ることはできません。

重忠が矢にあたった時に「我が心正しかれば、この矢に枝葉を生じ繁茂せよ」と言い、二本の矢を地面につき立てました。根づいた矢は、毎年二本ずつ増え、茂り続けたと言われています。

### ●首塚

重忠の首が、祭られた所と言われています。区役所裏側のやや小高い場所にあり、『首塚』と書かれた標柱が目印です。現在は、西向きですが、以前は南を向いていたそうです。



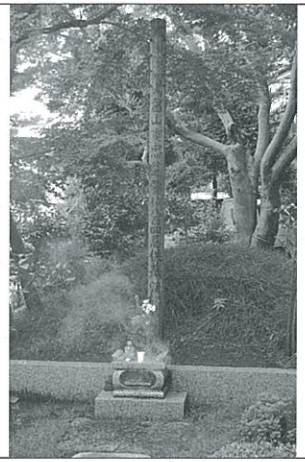
その側には、首を洗い清めたと言われる『首洗い井戸』がありましたが、現在はなくなっています。河原に、直径一メートル程の穴があり、水が湧いていたと言います。

## ●駕籠塚

畠山重忠の内室（身分の高い人の妻のこと）「菊の前」は、合戦の連絡を受け、急ぎ駆けつけました。

しかし、この地で重忠戦死を聞いて悲しみ、自害しました。その場所に駕籠ごと埋葬されたといわれています。

以前は、浄水場の中に周りを竹で囲まれた大きな塚があったそうです。昭和三十年に場外に移され、その後、昭和四九年に現在の姿に整備されました。



## ●六ツ塚（薬王寺）

畠山重忠をはじめ、一族郎党百三十四騎を埋めたと伝えられている六つの塚があります。

霊堂である薬王寺には重忠の霊が祭られており、毎年、命日の六月二十二日には盛大な慰霊祭が催されます。

## ●すずり石水

重忠が鶴ヶ峰に陣を構えたとき、この水で墨をすったと伝えられています。

昭和のはじめの頃までは、崖からの湧き水があったと言われています。今は整備されて見ることはできませんが、当時のけわしかった崖の様子は想像できます。『すずり石水』の標柱が目印です。

## ●矢畑・越し巻き

二俣川の合戦のとき、重忠の陣に向かっていっせいに放った北条勢の矢が、このあたり一面につきささり、まるで矢の畑のようになったということから『矢畑』と呼ばれています。

また、このあたりで重忠が取り囲まれたというので『越し巻き』というそうですが、その矢が腰巻きのようにぐるりと取り巻いたので、そのように呼ばれたという説もあります。

## ●清来寺

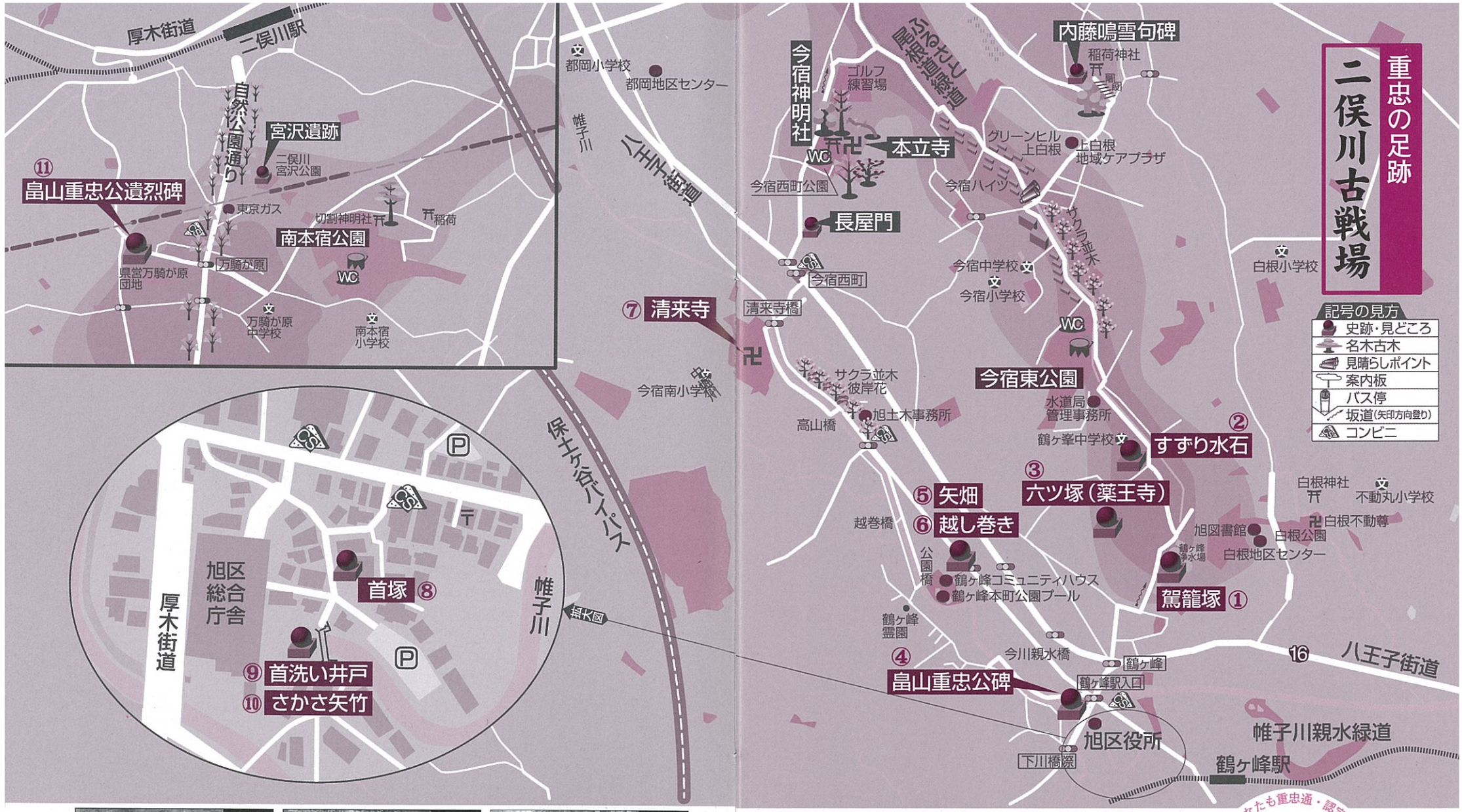
江戸時代末期に、畠山重忠の武勇をたたえるために編集された「夏野の露」という絵巻が伝えられています。

境内には、鎌倉時代に、伝令として使っていた鐘があったという鐘楼塚があります。この塚には、畠山重忠の所持していた観音像が埋められているので観音塚と呼ぶとも伝えられています。

## ●畠山重忠公遺烈碑

明治二五年、畠山重忠をしのび、土地の有志五十七人により建立されました。万騎が原は、牧が原といわれていたのが、ここに北条勢が数万騎あまり陣を構えたことから「万騎が原」というようになったと伝えられています。

# 重忠の足跡
# 二俣川古戦場



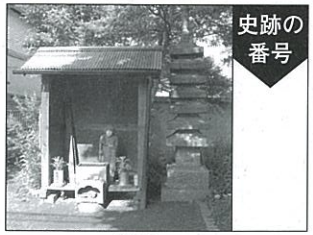

上の地図を見て、史跡の番号を答えてください。

史跡の番号

史跡の番号

・これであなたも重忠通・認定スタンプ・旭区ふるさとの歴史再発見・鎌倉武将畠山重忠

史跡の番号


史跡の番号

史跡の番号

# 終わりに

畠山重忠は一二〇五年六月二十二日に横浜市旭区の二俣川付近で、鎌倉幕府の大軍と戦って戦死しました。区内の二俣川から鶴ケ峰にかけては、重忠ゆかりの史跡が多く残っています。これらの史跡は、旭区民が重忠に親しみをもち、大切に守ってきたものです。

旭区では、毎年重忠の命日には、旭区観光協会も協力し、区民の方々だけでなく、岩手県、埼玉県、静岡県、東京都などから末孫など、重忠ゆかりの方々をお呼びして、区内鶴ケ峰本町の薬王寺において慰霊祭が行われています。

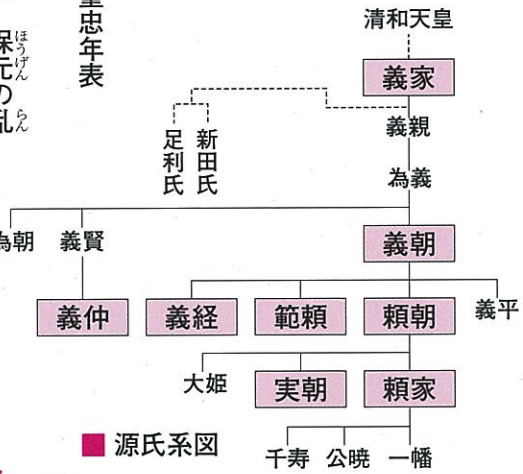
ところで畠山重忠は、今から半世紀ほど前まで、鎌倉武士の鑑として、歴史上の国民的な英雄としてよく知られていました。しかし、史実としては不明の部分が多いと言われており、史跡なども後世につくられたものもあり、資料としては「吾妻鏡」や「平家物語」などにおいて、その内容を検討していく必要があります。

この冊子をお読みになった皆様も、これをきっかけに畠山重忠とその時代、また旭区の歴史について考え、より一層地域への理解を深めていただければ幸いです。

旭区観光協会

## ■畠山重忠年表

| | |
|---|---|
| 一一五六 | 保元の乱 |
| 一一五九 | 平清盛・源義朝らが反対勢力を倒す |
| 一一六〇 | 平治の乱　清盛が義朝を倒す |
| 一一六四 | 源頼朝、伊豆に流される |
| 一一六七 | 重忠、誕生 |
| 一一八〇 | 平清盛、太政大臣となる |
| | 重忠、三浦義澄と合戦（小坪の戦い） |
| 一一八一 | 重忠、長井の渡しで頼朝と面会 |
| 一一八三 | 平清盛、六四才で亡くなる |
| | 木曾義仲入京。平家、都落ち |
| 一一八四 | 宇治川の戦い |
| | 重忠、源義経と共に都に入る |
| 一一八五 | 一の谷の戦い |
| | 屋島の戦い |
| 一一八六 | 壇ノ浦の戦いに敗れ、平家滅亡 |
| 一一八七 | 静御前の舞に、重忠、銅拍子を打つ |
| | 重忠、代官の不正で所領を失う |
| | 重忠、謀反の意ありと讒言される |
| 一一八九 | 源義経、衣川で自害 |
| | 重忠、奥州藤原氏追討の先陣となる |
| 一一九二 | 源頼朝、征夷大将軍になる |
| | 永福寺の建立進む |
| 一一九九 | 頼朝死去。重忠、後事を託される |
| 二〇二 | 源頼家、征夷大将軍になる |
| 二〇三 | 源実朝、征夷大将軍になる |
| 二〇四 | 頼家、伊豆修善寺で謀殺される |
| 二〇五 | 北条時政の策略により、重忠、二俣川で討ち死に |
| | 時政追放され、北条義時執権となる |
| 二一九 | 実朝、公暁に暗殺される。公暁も殺され源氏の正統絶える |




■源氏系図